

(29) バレイショ  
ア 殺菌剤

農薬名	成分名	系統名	FRAC コード	適用病害虫名								注意事項		
				疫菌	黒核	黒あざ	黒あし	そ軟	粉状	粉状	粉状			
アグリマイシン-100	キシテトラサイクリン・ストレプトマイシン	混合剤	41・25	◎			◎	◎	◎					
アグレプト水和剤 マイシン20水和剤	ストレプトマイシン	抗生物質	25	◎			◎	◎	◎					
アタッキン水和剤	ストレプトマイシン・チオファネートメチル	混合剤	25・1			◎	◎	◎						
アミスター20フロアブル	アゾキシストロビン	ストロビリン	11	◎		◎								
エキナイン顆粒水和剤	シモキサニル・ベンチアカルブ・イソプロピル	混合剤	27・40	◎										
エコマイト バイオキパー水和剤	非病原性エルビニアカトホーラ	生物農薬							◎					
エトフィンフロアブル	エトホキサム	アミド	22	◎										
エムダイファー水和剤	マンゼブ	有機硫黄	M03	◎										
オラクル顆粒水和剤	アミスルフロム	その他	21							◎				
カスミンボルドー	カスカマイシン・塩基性塩化銅	混合剤	24・M01	◎						◎				
カーゼートPZ水和剤	シモキサニル・マンゼブ	混合剤	27・M03	◎										
カーニバル水和剤	ジメトモルフ・TPN	混合剤	40・M05	◎										
カナメフロアブル	インビルホキサム	その他	7			◎								
カンパネラ水和剤 ベネセット水和剤	ベンチアカルブ・イソプロピル・マンゼブ	混合剤	40・M03	◎										
コサイド3000	水酸化第二銅	無機殺菌	M01	◎				◎	◎					
サーガ水和剤	イミダジゾール・シラ酸塩・マンゼブ	混合剤	M07・M03	◎										
ザンプロDMフロアブル	アトクテラジン・ジメトモルフ	混合剤	45・40	◎										
サンボルドー	塩基性塩化銅	無機殺菌	M01	◎										
シードラック水和剤	金属銀	無機殺菌	—					◎						
ジマンダイセン水和剤	マンゼブ	有機硫黄	M03	◎										
スターナ水和剤	キノリニック酸	その他	31						◎					
セイビアーフロアブル20	フルジホキサニル	その他	12					◎						
ゾーベックエンカンティアSE	キサチアピプロリン・ファミキサトリン	混合剤	49・11	◎										
ダイナモ顆粒水和剤	アミスルフロム・シモキサニル	混合剤	21・27	◎										
ダコニール1000	TPN	その他	M05	◎										
ドイツボルドーA	塩基性塩化銅	無機殺菌	M01	◎										
トップジンM水和剤	チオファネートメチル	ベンゾイミダゾール	1		◎									
銅ストマイ水和剤	塩基性塩化銅・ストレプトマイシン	混合剤	M01・25	◎			◎	◎	◎					
ナレート水和剤	キノリニック酸・有機銅	混合剤	31・M01						◎					



(29) バレイシヨ  
イ 殺虫剤

農 薬 名	成 分 名	系 統 名	I R A C コード	適 用 病 害 虫 名										注 意 事 項		
				ア ブ ラ ム シ 類	ジ ヤ ガ イ モ ガ	テ ン ト ウ ム シ ダ マ シ 類	ニ ジ ユ ウ ヤ ホ シ テ ン ト ウ	オ オ ニ ジ ユ ウ ヤ ホ シ テ ン ト ウ	ヨ ト ウ ム シ	ハ ス モ ン ヨ ト ウ	ワ タ ア ブ ラ ム シ	ネ グ サ レ セ ン チ ユ ウ 類	ネ コ ブ セ ン チ ユ ウ 類			
ア ク タ ラ 顆 粒 水 溶 剤	チアトキサム	ネニコチノイド*	4A	◎		◎										
ア ク タ ラ 粒 剤 5	チアトキサム	ネニコチノイド*	4A	◎												
ア グ ロ ス リ ン 水 和 剤	シベルマトリン	ピレスロイド*	3A	◎												
ア デ ィ オ ン 乳 剤	ベルマトリン	ピレスロイド*	3A	◎		◎										
ア ド マ イ ヤ ー 顆 粒 水 和 剤	イタダクプロリド*	ネニコチノイド*	4A	◎				◎								
ア ド マ イ ヤ ー 1 粒 剤	イタダクプロリド*	ネニコチノイド*	4A	◎												
ア ド マ イ ヤ ー 水 和 剤	イタダクプロリド*	ネニコチノイド*	4A	◎												
ウ ラ ラ D F	フロニカミト*	その他	29	◎												
エ ル サ ン 乳 剤	PAP	有機リン	1B	◎			◎		◎	◎						
エ ン セ ダ ン 乳 剤	プロフェノホス	有機リン	1B	◎		◎			◎							
オ ル ト ラ ン 水 和 剤	アセフェート	有機リン	1B	◎	◎	幼			◎							幼:【テントウムシガマシ幼虫に適用】
オ ル ト ラ ン 粒 剤	アセフェート	有機リン	1B	◎												
コ ル ト 顆 粒 水 和 剤	ピリフルキサゾン	その他	9B	◎												
ジ エ イ エ ー ス 粒 剤	アセフェート	有機リン	1B	◎												
ス ミ チ オ ン 乳 剤	MEP	有機リン	1B	◎		◎										
ダ ン ト ツ 水 溶 剤	クロチアエジン	ネニコチノイド*	4A	◎												
ダ ン ト ツ 水 溶 剤	クロチアエジン	ネニコチノイド*	4A	◎		◎										
チ ェ ス 顆 粒 水 和 剤	ピメトジン	その他	9B	◎												
デ ナ ボ ン 水 和 剤 5 0	NAC	カーバメート	1A			◎					◎					
テ ル ス タ ー 水 和 剤	ピフェントリン	ピレスロイド*	3A	◎												
デ ル フ ィ ン 顆 粒 水 和 剤	BT	生物農薬	11A								イ					イ:【イモ類登録】
ト ク チ オ ン 乳 剤	プロチオホス	有機リン	1B	◎	◎				◎							
ト レ ボ ン エ ア ー	エトフェンプロックス	ピレスロイド*	3A	◎												無人航空機利用
ト レ ボ ン 乳 剤	エトフェンプロックス	ピレスロイド*	3A	◎												
ト レ ボ ン E W	エトフェンプロックス	ピレスロイド*	3A	◎												
ネ マ キ ッ ク 液 剤	イシアホス	有機リン	1B									◎				
ネ マ キ ッ ク 粒 剤	イシアホス	殺線虫	1B									◎	◎			
ネ マ ク リ ー ン 粒 剤	フルピラム	殺線虫										◎	◎			
ネ マ ト リ ン エ ー ス 粒 剤	ホスチアセート	有機リン	1B	◎									◎			
バ イ デ ー ト L 粒 剤	キサミル	カーバメート	1A	◎								◎				



(29) バレイショ  
ウ 土壤消毒剤

農 薬 名	成 分 名	RAC コード I:殺虫 F:殺菌	適 用 病 害 虫 名												注 意 事 項
			ケ ラ	ネ キ リ ム シ 類	ハ リ ガ ネ ム シ 類	セ ン チ ユ ウ 類	ネ グ サ レ セ ン チ ユ ウ 類	ネ コ ブ セ ン チ ユ ウ 類	青 枯 病	萎 凋 病	亀 の 甲 症	白 絹 病	そ う か 病	粉 状 そ う か 病	
ガ バ ス ア ミ ド 微 粒 剤	タゾメット	I:8F								◎			◎	◎	
キ ル パ ー	カーハムナトリウム塩	I:8F											◎		
ク ロ ー ル ピ ク リ ン	クロルピクリン	I:8B	◎	◎	◎	◎			◎		◎		◎		
ク ロ ピ ク 8 0 ド ジ ョ ウ ピ ク リ ン ド ロ ク ロ ー ル	クロルピクリン	I:8B		◎	◎	◎			◎				◎		
ク ロ ル ピ ク リ ン 錠 剤	クロルピクリン	I:8B				◎			◎						
ソ イ リ ー ン	クロルピクリン・D-D	I:8B・8A					◎	◎	◎				◎		
ダ ブ ル ス ト ッ パ ー	クロルピクリン・D-D	I:8B・8A					◎	◎		◎			◎		
テ D C 油 D	D-D	I:8A					◎	◎	◎				◎		

## エ 病害虫防除法（バレイシヨ）

### （ア）青枯病 *Ralstonia solanacearum*

#### （防除のねらい）

主に土壌感染するが、罹病種いもによる伝染も起こる。春作では収穫期に近くなるほど、秋作では9～10月残暑が続き雨が多いと多発することがある。ネコブセンチュウの加害は本病の発生を助長するので、殺線虫剤使用によって発病をある程度は抑制できる。

#### （耕種的防除法）

- （1）無病種いもを用い、発病株は抜き取る。
- （2）秋作では気温が下がり始める頃に植え付ける。
- （3）排水をよくする。

### （イ）疫 病 *Phytophthora infestans*

#### （防除のねらい）

伝染源は罹病種いもや畑に放置された屑いもなどである。秋作より春作の5～6月、雨が多いほどまん延する。春作では、植付50～60日後頃、開花期を過ぎて雨天日が多く、平均気温が15～16℃で、降雨が数日続くと発生し、曇雨天（18～20℃）で経過すると発病が激化する。発生を認めてから薬剤散布を行っても効果が十分でないので予防散布に努める。また、塊茎腐敗となる新しいもへの感染は、多量の降雨があり、地温が16℃以下で多発し、18℃では少なくとも20℃以上ではほとんど生じない。とくに、地上部での病斑が多く、収穫時にいも表面に孢子が付着しやすい条件で多発する。

#### （耕種的防除法）

- （1）常発地では耐病性品種を選ぶ。マークイン、デジマは本病に弱い。シマバラ、農林1号は強く、ニシユタカは中である。
- （2）ポリマルチをすると発生が少ない傾向がある。
- （3）塊茎の収穫時感染防止には天気の良い日に掘り取り、土をよく乾かしてから貯蔵する。
- （4）種いもは健全なものを選ぶ。

### （ウ）黒あざ病 *Rhizoctonia solani*

#### （防除のねらい）

春作、秋作とも発生するが、春の成熟栽培に発生が多い。種いもによる伝染が強く、種いもの消毒の必要性が高い。

#### （耕種的防除法）

- （1）無病種いもを選ぶ。
- （2）無硫酸根肥料を施す。酸性土壌で発病が多いので矯正する。
- （3）寄主以外の作物と3年以上の輪作をする。
- （4）種いもは健全なものを選ぶ。

### （エ）そうか病 *Streptomyces scabies*

#### （防除のねらい）

土壌伝染と種いも伝染し、病原菌は長期間土壌中で生存する。発病は見かけ上、pH 4.7～4.8を境にして、これより上昇すれば発病は増加し、低ければ平衡状態か減少傾向をたどる。なお、種いも伝染は強酸性土壌でも起こる。いもの形成期に土壌が乾燥すると多発する。石灰や堆肥を多く施用すると発生を助長する。塊茎肥大初期に土壌が乾燥すると発生が多くなる。クロールピクリン剤による土壌消毒効果はpH 5以下では安定した効果が認められるが、pH 5以上の土壌ではその効果が現れにくい場合がある。また、土壌消毒ほ場に感染種いも（見かけ上健全でも）を植えると発病はかえって増加するので、必ず種いも消毒を実施する。

#### （耕種的防除法）

- （1）pH4.5～4.8の酸性条件で栽培する。
- （2）連作を避け、無病種いもを使用する。
- （3）耐病性の強い品種を栽培する。シマバラはやや強く、デジマ、農林1号は中程度、ニシユタカは弱い。

**(オ) 軟腐病 *Erwinia carotovora* subsp. *carotovora***

**(防除のねらい)**

多数の作物を侵す土壌伝染性病害である。生育中の茎葉の被害よりも貯蔵中のいもの腐敗が問題となる。初め地面に接した小葉に不整形で水浸状の軟腐病斑を形成する。この病斑は速やかに葉柄、主茎に進行し、その後、いもに達するので、小葉の発病初期に防除を行う。収穫期に雨が降り多量の水田に栽培したとき発生しやすいので、排水に留意し、適正な栽培、収穫、貯蔵を守るようにする。

**(耕種的防除法)**

- (1) カリが不足しないよう施肥量を適正にする。
- (2) 収穫は傷を着けないようにし、強日射にさらさないようする（春作）。冷涼なところに貯蔵する。
- (3) 発病の多いほ場では種いもは切断せず、丸いもを使用する。
- (4) ほ場の排水をよくする。

**(カ) 粉状そうか病 *Spongospora subterranea***

**(防除のねらい)**

病原菌は種いもまたは土壌中で越年し伝染源となる。水田など多湿土壌で発生し易く、塊茎肥大初期に雨が降り多量と発生し易い。病原菌は土壌中で3～5年以上生存し薬剤による適当な防除法がないので、耕種的防除を積極的に励行する必要がある。

**(耕種的防除法)**

- (1) 無病種いもを使用する。
- (2) 排水を良くする。特に水田裏作の場合に注意する。
- (3) 輪作を行う。
- (4) 耐病性品種を使用する。

粉状そうか病に対する品種耐病性

強	中	弱
農林1号	タチバナ	ウンゼン
メークイン	シマバラ	チヂワ
	デジマ	男爵いも

**(キ) 輪腐病 *Clavibacter michiganense* pv. *sepedonicum***

**(防除のねらい)**

伝染は種いもで、罹病種いもを切った刃物でも伝染する。開花期頃から地上部の病徴が現れるので、見付け次第取り除く必要がある。

**(耕種的防除法)**

- (1) 無病種いもを選ぶ。
- (2) 種いもの切断刃は数秒間熱湯につけて消毒する。
- (3) 被害株は除去する。

**(ク) モザイク病 PVY**

**(防除のねらい)**

主な病原ウイルスはジャガイモウイルスY (PVY) である。種いもによって伝染するほか、アブラムシ類によっても伝染する。アブラムシ類防除だけでは効果が顕著でないため、耕種的防除を主に行う。

**(耕種的防除法)**

- (1) 発病株を早めに抜き取る。
- (2) 種いもはやや早めに掘り取る。

## (ケ) 葉巻病 PLRV

### (防除のねらい)

ジャガイモ葉巻ウイルス (PLRV) はアブラムシによって永続伝搬されるほか、種いもによっても伝染する。感染したいもを植えると、萌芽3週間ぐらいで葉巻症状が現れる。発病株は、速やかに抜き取り除去することが大切であるが、生育初期2～3週間が感染し易いため、伝染の防止には生育初期にアブラムシを防除するのが最も有効である。

### (耕種的防除法)

- (1) 発病株を早めに抜き取る。
- (2) 耐病性品種を用いる。シマバラは強く、ウンゼン、デジマは中、ニシユタカ、農林1号、タチバナ、メークインは弱い。

## (コ) アブラムシ類

### (防除のねらい)

吸汁による直接被害より、ウイルス媒介が問題となる。特にタバコ黄斑えそ病の発生に関係するので注意する。乾燥が続くと、とくにワタアブラムシが急激に増えるので注意する。

### (耕種的防除法)

ポリマルチをすることで防除回数を軽減できる。

## (サ) ジャガイモガ

### (防除のねらい)

生育中、時として貯蔵中のイモも食害される。春秋作とも萌芽間もない頃から被害が出始める。貯蔵中の食害は夏季に多いので、生育中の防除を徹底し、発生源を持ち込まないようにする。

### (耕種的防除法)

- (1) 栽培期間中、イモが露出しないよう培土をよくする。
- (2) 掘り取ったイモはほ場に長く放置しない。
- (3) 貯蔵したイモは寒冷紗、こも、不織布などで覆う。

## (シ) ネキリムシ類

### (防除のねらい)

被害は4～5月と9～10月に多い。生育初期の地際部の切断防止をねらって薬剤処理を行う。

## (ス) ニジュウヤホシテントウ (テントウムシダマシ)

### (防除のねらい)

春作では4月下旬頃から越冬成虫が飛来後、食害して産卵を始め、5月下旬には幼虫食害が重なり被害が目立つので、アブラムシとの同時防除で成虫を併殺する。秋作では9月中～10月中旬にかけて発生するが、発生量は地域間差が大きい。

### (耕種的防除法)

春作ジャガイモは早植えする。

## (セ) ケラ

### (防除のねらい)

5～6月頃の被害が多い。気温が10℃前後から活動し始める。発生地帯では作付前に土壤殺虫剤を施す必要がある。